

## 四 プルードン

「共同体と民主主義との矛盾が」と、プルードンは一八四四年ある手紙に書いた、「ひとたび明らかにされ、サン・シモンおよびフリーエのユートピアと運命をともしにするならば、そのときこそ、科学の水準にまでみずから高めた社会主義、経済学以外のなにものでもない社会主義は、社会を引きとらえ、抵抗することのできない力をもって社会をさらに前方の目的地へ押しやるであろう。……社会主義はまだ自覚していない。今ではみずからを共產主義とよんでいる。」初めの文句は多くの点でマルクスの言い方を思い起させる。この手紙が書かれる三ヶ月前にマルクスはパリでほぼ十歳上のプルードンに会い、直ちに夜を徹して彼と語り合った。

プルードンは、「ユートピア的」体系に逆戻りしようとは思わなかったし、これら体系の本質的原則にも強く反対したけれども、やはりそれとともにはじまった発展の線をたどった。彼は、まさに既往のすべてを前提とするより高い平面に立ってのみ新たに歩みはじめることによって、この線をたどりつづけた。しかし、その際プルードンは、古い体系に新しい体系をつけ加えることには深い嫌悪の念をいだいていた。「体系など」と彼は一八四九年に書いた、「私は

どんなものをもっていない。これからもたないであろうし、そうした要求はきっぱり拒否する。人類の体系は、人類の終局点においてのみはじめて知られるであろう。……私のかかわることは、人類が現在歩んでいる途を知ることであり、またできればこの途を切りひらくことである。」実際のプルードンは、マルクスがその反駁書や、またその前にあるロシアの友人(アンネンコフ)にあてた手紙で攻撃している如き人間、その手紙でいっているような彼にとつては「カテゴリーと抽象とが第一義的事実であり」、「歴史をつくる」「原動力であり」、「現実の生活に変化を引き起すためにはそれらを変えさせずれば十分であるとする如き人間とは、きわめて遠く異なっている。このようなプルードンのヘーゲル化は的を失している。何人もプルードン以上に誠実かつ辛辣に時代の社会的現実の秘密を探究しなかった。「経済的範疇は」とマルクスはその反駁書で説いた、「社会的生産関係の理論的表現にすぎない。」しかるにプルードンは、マルクスのいうところによれば、生産関係のうちに原理の体現しか見ていない。だが一定の社会関係は、綿布や麻布などと同様に、まさしく人間によって作り出されるのである。プルードンは、読んでいたこのマルクスの著書の余白に正当にもこう誌した。「これはまさしく自分がいっていることだ。社会は法則と、これが経験材料とを作り出すのだ。」晩年のもっとも円熟した著作の一つである『連合の原理について』(一八六三年)においてプルードンは、理性について語り、理性は、諸々の力の質を考慮にいれ、それら力の法則を尊重するという条件の下に歴

史の動きを自由の方向に向わせるといったとき、同じ認識を別の側面から語っているのである。「体系」にたいするプルードンの嫌悪は、社会的現実にたいする彼の基本的な関係に基づいている。彼は社会をその対立と矛盾において観察し、これを認識し表明しつくすまで止めなかった。プルードンは矛盾のうちに身を潜め、矛盾に耐えるだけの力と勇氣をもつ人物であった。プルードンは、そのために彼をパスカルにくらべたウナムノ(スベインの思想家、作家、一八六四—一九三六年)が考えたように矛盾のうちに留ってはいなかった。しかし彼は、矛盾をその残忍酷薄さのすべてにわたってとらえるのに必要な間、「諸要素の闘争、対立者の衝突」を彼の思考において十分解決するのに必要な間は、矛盾のうちに留っていたし、しかもその期間は、人間の生命の短かさからすれば、往々にして余りにも長かった。ウナムノがパスカルについて彼の論理は何ら弁証法ではなく論争法(論争)であったといったことは、ある程度プルードンにもあてはまる。しかし彼がパスカルについて、定立と反定立との間にいかなる総合をも求めなかったといっていることは、実はプルードンにはあてはまらない。プルードンは、ヘーゲルの意味での総合、すなわちいかなる否定の否定をも求めはしなかった。彼が求めたのは、一八四四年の手紙でいっているように、「あらゆる矛盾の総合的解決」である。そしてこの言葉で彼が考えているのは、容赦することなく見つけ出した矛盾、彼がカント認識論の領域から社会学の領域に移している概念によれば、社会的「アンチノミー」から脱け出る途を探すことである。プルードンにとって定立

と反定立とは異なる歴史的時期に体现するのではなく、共存するところの範疇であった。彼はヘーゲルからただ形式だけを借り、歴史家ヘーゲルからはほとんど何一つ採りいれなかった。彼は(あらゆる歴史的探索にもかかわらず)いかなる歴史的思想家でもなく、社会批判的思想家であって、それが彼の強味でありまた限界でもあった。与えられた現実のうちに捉え得る限りの矛盾を捉えることが、彼にとっては方途を見つけ出すための認識上の前提である。彼が傾向と反対傾向とを並べて説明し、その両側面の一方を絶対者にまで高めることを拒むのはこのためである。「すべての觀念が」と彼はその『進歩の哲学』(一八五三年)で書いている、「もし人々がそれを排他的絶対的な意味にとるときは、あるいはこうした意味に心を奪われるときは、誤謬であり、すなわち矛盾しており、不合理である。」排他性、不動性へのあらゆる傾向が頽落への傾向である。そしていかなる精神的要因にも許されないと同様に、いかなる物質的要因にもそれが絶対的必然性をもって支配するものと見なすことは許されない。プルードンは技術的・物質的变化から人類の救済をたくらむ下からの盲目的な摂理など信じないし、また絶対的に妥当な体系を案出してこれを人類に課するところの、意のままに浮動する人間精神をも信じない。彼は誤れる絶対的信仰、宿命の支配からの解放にこそ人類本来の進路を認めている。「人間はもはや機械化されることを欲しない。人間の努力は宿命からの脱却を目ざしている。」ここからまた、「政治組織および社会的信仰のあらゆるユートピアにたいする一般的な嫌悪」

が生れてくる。ここでブルードンがあげているのはオウエン、フリーエおよびサン・シモン主義者のアンファンタンであり、さらにまたオーギュスト・コントである。

いかなる歴史的原理も、とブルードンは説いている、一つの思想体系のうちに十分に包括されることはできない。いかなる原理も解釈を必要とし、その解釈は正しいこともあれば誤ることもある。そしてそれらの解釈は直接または間接に原理の歴史的進路に影響をおよぼすのである。しかもさらに困難を加えることとして、いかなる時代もただ一つの原理が支配するのではないということが注意されなければならない。「すべての原理が」とブルードンはその遺著『カエサル主義とキリスト教』（一八八三年）に書いている、「理性におけると同じく歴史においても同時代的である。」それら原理は相互の関係において異なる時代に異なる力をもつてすぎない。一つの原理が制覇を求めて争うときには、それが歪められた形ではなく、真の本質において人間意識のうちに入りこみ、彼の意志に働きかけることが重要である。フランス革命とともに告げられた「社会的時代」——これには当然、オーガスタス時代がキリスト教に先立ったように、その前に過渡期すなわち「憲法時代」が来た。これも一つの革新としてであったが、現在の奥底にまで達する革新ではなかった——は、宗教および政府の原理にたいする経済の原理の優位を特徴とする。この経済的原理とは、「文明諸国の連合共和国を達成したのちに、地球の全表面にわたって人類の統一と連帯とを組織すべき新たな革命をもって、ヨーロッパを社会

主義の名の下に湧き立たせる」ところのものである。この経済的原理をその真の本質において理解し、かくしてこの原理とその概念を横取りしている曲説との間の宿命的な争いを防止することが、今日きわめて重要なのである。

ブルードンは、さきにもいったように、たんに「ユートピア」社会主義の発展の線を先へたどったのではなく、最初からたどりはじめ、しかも従来ものが加工され作りかえられたように見える仕方ではじめた。別して彼はサン・シモンが停止した地点から開始したのではなく、むしろ経済を基にして建設され、経済の編成によって規定される制度にたいするサン・シモンの要求をあらためて、しかも新しい一層包括的な、社会的現実の深みに徹する仕方で提出した。サン・シモンは国家の改造から出発したが、ブルードンは社会の変改から出発した。社会の真の新たな形成は、社会的秩序と政治的秩序との間の関係の根本的変更からのみ起ることができ。問題はもはや一つの政治制度を他の政治制度に代えることではありえない。社会に接木された政治制度に、社会本来の制度がとって代わらなければならない。「社会を悩ます一切の無秩序」と、ブルードンはいっている、「市民の抑圧および国民の頹廢の第一の原因は、公権力の単一かつ体系的な集中化にある。……この巨大な寄生物をできるだけ早く仕末することが必要なのだ。」その必要がいつから、またどのような理由でかくもさし迫ってきたかについては語られていない。しかしわれわれは次の二つの事柄を思い出すとき、容易にそれを補うことが

できるであろう。第一には、社会の構造が豊かであり、いずれも生活力の旺盛な様々の共同体と共同体連合とから構成されていた間は、国家は視界を狭め、歩みを妨げる壁ではあったが、この壁の内側では自発的な共同社会的生活が営まれ形成されることができたのに、社会の構造が貧困なるにつれて国家は牢獄になるといふことである。第二には、まさにこのような構造的に貧困な社会がフランス革命にさいして自覚され、国家に対立する社会として存在を意識するに至ったこと、そして今やその構造的更新は、非共同社会的秩序を社会自体によって果されえない機能に制限することによってしか期待され得ないこと、これにたいして仕事の本来の指導は、労働を営む社会自体から生じ、それ自体の機関を形成するということである。「国家の任務の制限こそは自由、集団的および個人的自由にとって死活の問題である。」プルードンの根本思想が何ら個人主義的ではないことはここでもすでに明白である。彼が国家に対立させているのは個人そのものではなくその集団、個人の自発的結合としての集団との有機的関連における個人である。「宗教改革以後、とくにフランス革命以後、世界に新しい精神が出現した。自由の理念が急速に一般化したため、自由はたんに個人の関心事ではなく、集団のうちにもまた存在しなければならぬことを人々は理解した。」プルードンの初期の著作ではなお一種の個人主義が優位を占めていたが、しかしすでに彼は「人類は独占によって地球を己のものとしたが、結社によって完全にその主人となるであろう」ということを知っていた。またその個人

主義は、プルードンの思想の発展につれて（農民の個人的所有は大切にしながらも）、個人と全体との間の未解決な関係は、内部関係の力で生きていくところの広範囲に自律的な集団——自治体または協同組合——を通して均衡を保つであろうという見解を前にして、いよいよ後退した。プルードンにおいては構造主義的見地そのものは表明されていないにしても、われわれは、彼がますますこの見地に近づいていることに気づくのである。彼の反中央集権主義はいよいよもって自治体主義と連合主義（これはたしかに、彼が一八六三年の或る手紙で書いているように、「三十年來彼の血管に沸っていた」のである）に向って進み、すなわち彼はいよいよ構造主義的となったのである。「高度の中央集権化は」と彼は一八六〇年に書いている、「連合主義的制度と自治体的慣習とが、それにとって代ることによって」消滅すべきである。ここで注目しているのは、形成せらるべき新しい「制度」と維持せらるべき共同社会的形式すなわち「慣習」とを結びつけていることである。

プルードンがその時代の社会秩序の無定形的性格をどのように強く感じたかは、普通選挙権の問題にたいする彼の態度から、おそらく最もよく知ることができよう。「普通選挙権は」、彼はその小著『社会問題の解決』（一八四八年）でいっている、「一種のアトミズムであり、立法者は、民衆をその本質的一体性において発言させることはできないために、普通選挙権によって市民が一人一人その意見を表明することを求めるのである。それはあたかもエビクロス派の

哲学者が思考や意志や理解をアトムアトムの組合せによって説明したのと同様である。「ブルードンが一八四八年に国民議会での演説でいっているように、選挙権は「組織原理」を必要とする。この原理は社会の事実上の集団構成グループ・コンポジションのみに基づくことができる。「自然的諸集団を維持することこそは」とブルードンは一八六三年に書いている、「選挙権行使にとって最も重要である。これこそは投票の本質的前提条件である。それなくしては投票に何らの本性性も、何らの公明さも、はっきり表明されたいかなる意味も存在しない。……選挙活動における自然的集団の破壊は、民族そのものの道徳的破壊であり、革命の思想の否定であろう。」選挙の無定形的基礎づけは、「町やコミューンや県の政治生活を破壊し、またこのようにすべての自治体および地方の自治を破壊することによって普通選挙権の発展を阻害すること以外の何事をも目ざすものではない。」そうなった暁には、国民の身体は分子の集合、「それに優越する思想、中心的思想が外部から動かす塵の集積」を成すにすぎない。われわれは大声で統一だけを求め、統一自体はその犠牲にしてしまった。」今や「公共意識の窒息、人民主権の自殺」でしかない普通選挙権は事実的集団構成の表現となつてはじめて道理にかなない、道徳的また革命的なものとなる。その前提はもちろん「職務部門の均衡が組織化され、特権が廃止」されることである。

ブルードンは、連合主義にとつて「解決すべき真の問題は政治的問題ではなくして経済的問題」であることを決して見のがしてはいない。「連合を不滅なものとするために為すべきこと

は」と彼はいつている、経済法を「連合法および一切の政治的秩序の基礎」として布告することである。経済法の改革は、労働者の協同組合に提起される次の二つの問題にたいする解答にしたがつて行われなければならない。すなわち労働は、いま資本が行っているように、企業の資金を自ら調達することができるかどうか、また企業の所有と指導が集団化されるかどうかという問題である。「これら問題の解答に」とブルードンはその注目すべき著作『取引所相場師必携』(一八五三年)に書いている、「労働者の全未来がかかっている。解答が肯定的であるときには人類の前に新しい世界が開かれるであろう。否定的であるならば、そのときにはプロレタリアに警告するがよからう、神と教会に身を委ねるがよい。この世の谷間では彼にとつていかなる希望も存在しないと。」ブルードンのこの肯定的解答の構想がその円熟した形での「相互主義」である。「一産業においてすべての労働者が」と彼は書いている、「彼らに賃銀を支払い彼らの生産物を保有する企業家のために働く代りに、たがいのために働き、かくて共同の生産物をつくることに協力し、その利益をたがいの間に分けるとき、相互性、互恵が存在する。あらゆる集団の労働を結合するところの相互性の原理を、社会単位としての労働協同組合にまで拡張せよ、そうすると諸君は、政治的、経済的、美的等すべての視点から見て従来の文明とは全く異なる文明を創造するであろう。」これが問題に対するブルードンの解答であり、彼はこれを次のように定式づける、「すべての者が結合し、すべての者が自由である。」しかしそうであるた

めには組合は上から押しつけられる制度となつてはならない。むしろ人びとは「生産の要求、生産物の安価、消費の必要、生産者自身の安全が要求する」(とプルードンは一八六四年に書いていた) 限りにおいてのみ、「生産のかまど」としての「労働者協同組合」を結成するであらう。このようにして協同組合を結成することによって労働者はたんに「物事の道理」にしたがっているだけであり、それ故に彼らは「協同組合の内部にまでその自由を確保することができ」るのである。このような考えからしてプルードンは一八四八年に、ルイ・ブラン(後には同様にラッサールも)が要求した国家の資金による「社会的工場」には当然反対した。プルードンはそのなかに中央集権化の新しい形態しか見ていない。そのときには、と彼はいつている、「労働者は、いま資本の国家理由によってまさにそうされようとしているのと同様に、友愛の国家理由によって編成され、結局は奴隷化されるであらう」ような多数の大きな組合が存在することになるであろう。「自由とか、一般の幸福とか、文明とかはどうなるであろうか。皆無だ。われわれは鎖は変えるであろうが、社会的理念は一步も前進しないであろう。」ここでプルードンは私たちが二十年后ギルケの偉大な著書で理論的表現を見出したところの見解を表明している。「ただ自由な組合のみが、」とギルケはいつている、「経済的自由が存続すべき共同社会をつくることができる。なぜなら、その成員の創意と創造力とから生れる組織こそは新たに建設された共同生活と同時に成員の個人生活を高めるからである。」

かくして共産主義的中央集権主義は、プルードンにとって、無気味な、編目のない完全なものにまで高められた絶対主義的中央集権主義の一変種のように思われた。この「独裁的強権的教義的体系は次の原則から出発する。すなわち個人は本質上集団に従属し、その権利と生活とはただ集団にのみ由来する。市民は、幼児が家族に属するように国家に属する、市民は国家の権力と所有との手中にあり、あらゆる事柄において国家に従属し服従する義務がある。」こうした点から、マルクスが(例の反駁書のために書いたが実際には収録されなかった文章で)、プルードンは「革命運動を理解する」能力がないといっている理由が理解できるように、プルードンが(その日記の書入れて)マルクスを「社会主義の条虫」と呼んだ理由も理解できるのである。共産主義の体系では、共有財産が一切の所有、個人的ならびに自治体的および協同組合的所有の廃止をもたらし、全般的組合がすべての特殊の組合を吸収し、集団的自由がすべての団体的、地方的および私的自由を呑みつくすはずである。中央集権主義的共産主義的政治体制をプルードンは一八六四年に次の記憶すべき言葉、「外見的には大衆の独裁に基づくように見えるけれども、大衆はそこで、古い絶対主義から借りた次の公式と原則、すなわち公権力の不可分性、吸収的中央集権化、分裂への刺戟と見なされる一切の個人的、団体的および地方的思想の組織的破壊、宗教裁判的警察制度にしたがって、一般的奴隷状態を確保するために必要とされる以外の力をもたないところの隙間のない民主主義」という言葉で規定した。プルードン

は、自分たちから遠くない将来に政治上および経済上の純然たる中央集権主義的共産主義がやってくるものと考えている。しかし彼は、「最後の危機の後に、新しい原理の呼びかけに応じて逆の方向に動きがはじまるであろう」ことを確信している。

これらの言葉が出てくる書物（死の少し前に完成した）、彼が「新しい民主主義の観念」を述べたものとして特別に重視した書物、すなわち『労働者階級の政治的能力』（一八六五年）は、彼が「六十人宣言」の鼓吹の下に書いたのであった。この宣言は、その大多数がプルードンの思想に近い一団の労働者の選挙宣言（一八六一年）であって、四つの社会主義的「宣言」の系列における第四のもの（第一はバブーフの「平等宣言」、第二はフリーエ主義者コンシデランの宣言、第三は「共産党宣言」）であり、プロレタリア自身のみならず発せられた最初のものである。プルードンがそこに示されたフランスにおける「社会主義の目ざめ」と労働者階級における「団体意識の表明」とを喜んだこの宣言では、とりわけ労働会議所（サン・シモン）の設置を要求しているが、しかしこれは、多くの人々が「奇異な混乱」から唱えたような（そこにはサン・シモンの考えが再現している）労働者と雇主とから構成されるものではない。「われわれが要求するのは普通選挙によって選ばれた労働者のみから成る会議所、労働会議所である。」この要求は、サン・シモンからプルードンへの新しい社会思想の発展を示す明白な証左である。

社会再組織の考えから構造的更新の考えに進むことによって、プルードンは決定的な一歩を踏み出した。「産業制度」は新しい構造を意味しないが、「連合主義」はそれを意味するのである。

プルードンは、互に浸透し合う二つの構造様式を当然に区別する。すなわち、彼が「農工連合」と名づけるところの労働集団の連合としての経済的構造と、権力の分散・統治権の分立、コミュニケーションおよび地方団体の最大限の自治の保障、自然的集団から組み立てられるより緩やかなより直接的な仕事の指導をもってできるだけ広範囲に官僚制にとって代えること等に基づくところの政治的構造とである。「憲法学」はプルードンによれば次の三つの命題に要約することができる。すなわち、(一)適度な大きさの、かなりの程度に自治的な集団を形成し、さらに連合によってこれら集団を結集すること。(二)連合せる各州に機関分割の原則にしたがって政府を組織すること。すなわち公権力の内部において分割しうる権限はすべて分割し、確定しうる権限はすべて確定し、このように分割し確定した権限をすべて様々の機関または職員に割り当て、何一つ分割せずにおくことなく、公開と抑制とのあらゆる条件をもって公権力をとりかかむこと。(三)連合せる州または地方および市町村の官庁を一つの中央官庁に統合する代りに中央官庁の権限を一般的発案、相互的保障および監督という単純な任務に制限すること。「社会の生活は個人の集団への、集団の連合への結合において営まれる。「あたかも多くの人々が、彼らの努力をともにすることによって、質においても強さにおいても各自の力の総和にまさる集合力を生

み出すと同じように、相互に交換関係のうちにもち来される多数の仕事場は、より高次の活力を生み出すであろう。」これは特別に「社会力」と考えることができよう。相互主義すなわち仕事の相互性に基づく経済の建設と連合主義すなわち集団の団結に基づく政治的秩序の建設とは、同一構造の二つの面にすぎない。「個人の力の集合化と集団の相互関係とによって、全国民は身体のような形態を取得する。」そして現実の人類は諸民族からその連合の連合として構成されるのである。

地方分権化思想の実現の問題についてはブルードンは、とくにその『課税の理論』(一八六一)年)で取扱った。そこで述べているように、政治的中央集権化は、多くの利点を示しながらも、余りに高価であることを彼は見のがしていない。政治的中央集権化は自明的なこととされているが、それはたんに集団的虚栄におもねるからではなく、さらに「理性は、幼児におけると同じく国民においても、大きさや大量と同様に単純さ、画一性、同一性、および階統性イニシャルティを求める」からである。それ故すべての古代王国がその型にたがって成立した中央集権化は、有効な訓練の手段となった。「人びとは単純な観念を好むし、またそれは当然でもある。不幸にして彼らの求めるこの単純さは、要素的な事物にしか見出すことができな。そして世界、社会、人間は分解し難い諸要素、相反する諸原理および相拮抗する諸力から成立している。有機体は錯雑を意味し、複雑、矛盾、対立、相互依存を意味する。中央集権的体制は大きさ、単純さおよび

び発展についてはすこぶるりっぱである。それにはただ一つのこと欠けている。すなわちこの体制において人間はもはや彼自身のものでない。そこでは彼は自分を感じることがなく、生きてもいないし、考慮されてもいない。」しかし人間が自己のものであり、自分を感じ、生きることできるような公的制度、人間を人間として考慮する公的制度の観念および要求は無拘束な思考領域に浮動しているのではなく、社会的現実の事実と傾向とに結びついているのである。現代の法治国家では「様々の集団は多くの物事に対していかなる指図をも必要としない。集団はその良心と理性以外のインスピレーションなしに、自らを治めることができる。」現代法の原則にしたがって構成されたすべての国家において、統治活動の漸次的減退、地方分権化が行われている。またこれに対応する発展が経済の面においても認められる。今日の技術の発達(ブルードンは一八六一年すでに、鉄道の改革に関するその著書でこのことを指摘したが、これが全く現実のものとなったのは、彼の死からずとに、運輸の動力化や生産の電力化の見込によってであった)は、人口の大都市への集中を不要にする傾向があり、「大衆の分散ならびにその再分布がはじまっている。」政治的重心は次第に都市から「新しい農業および工業集団」に移るにちがいない。

しかしブルードンは決して、地方分権化の過程が種々の領域ですでに熟成しつつあるという意見ではない。それどころか、政治の領域では人びとの意識と意志のうちに、重要な意味をも

つ逆の動きを認めている。「中央集権化の熱病が」と彼は一八六一年に書いている、「世界に蔓延している。人びとは、彼らになお残る自由に飽き、ただそれを失うことを望んでいるといつてよいであろう。……いたるところに見られるのは、権威への欲求、独立の倦怠なのか、それともたんに自治の無能力なのか。」この「熱病」、人間精神のこの重い疾病にたいしては、人間の内奥に働らく建設的、構造更新的諸力のみが救済することができる。これを表現したのが、一八六三年のある政治的著作の結論でブルードンが述べているところの「理念」である。「この理念は発生し、すでに流布している。」しかしそれを実現すべき勢力を獲得するためには、それは「事態の内部から生起」しなければならない。

当時、彼の洞察が最も鋭かった時代にもブルードンは、このような事態が切迫しているとは決して考えなかった。われわれには一八六〇年の彼の二、三の手紙から、かれが最近の将来をどのように想像していたかがわかる。「人はもはや」と彼は書いている、「自分を欺いてはならない。ヨーロッパは秩序と思想とに飽いている。ヨーロッパは暴力と原理蔑視との時代にはいりつつある。」また同じ手紙で、「やがて六つの大国の戦争がはじまるであろう。」それから数ヶ月の後にこう書いている、「やがて殺戮がやってくるだろう。そしてこの殺戮の後にくる無気力には怖るべきものがあるだろう。われわれは新しい時代の事実を目撃することはないであろう。われわれは暗闇のなかで闇いをつづけるであろう。われわれは、自分の義務を果すことに

よって余り多くを悲しむことなしにこの生活に堪える準備をしなければならない。われわれは互いに助け合い、暗闇のなかで互いに呼びかわし、機会ある毎に正義を実行しよう。」そして最後に「今や文明は、史上それに比敵するものがただ一つ、すなわちキリスト教の到来を決定した危機にしか見出されないような危機にのぞんでいる。過去から伝わるすべてのものが使いつくされ、すべての教義が廃棄された。それに代る新しいプログラムはまだできていない。というのは、それがまだ大衆の意識に入っていないことである。ここに私のいう解体が起る。これこそは社会の存在における最も冷酷な瞬間なのだ……私はいささかの幻影も描かないし、明日わが国に、あたかも魔法の杖の一振りでのように自由の魅りが見られようとも期待しない。……否、否、頹廢、しかも私はその終りを見きわめることのできない、一、二世代より短くはない期間つづくであろうところの頹廢、これがわれわれの運命なのだ……私はただ悪を見るのみであろう、私は暗闇のさ中に死ぬであろう。」しかし問題はまさに「われわれの義務を果す」ことである。同じ年ブルードンは歴史家ミシュレに書き送った。「ただ観念と心情とにおける十分な革命によってのみそれから脱することができます。私たちは、あなたも私も、そうした革命のために働いています。それは子孫にたいして、もし彼らが私たちを忘れなければ、私たちの名譽となるでしょう。」またその八年前にもブルードンは、アメリカに移住するようにとというある友人の契めにこう答えた。「私が人類解放のために働かなければならないのは、

あえて申しませんがこの土地です。ナポレオンのサーベルやイエズス会修道士の鞭や警察のスパイの眼の下においてです。私たちにとってここ以上に都合のよい空はありません。ここ以上に実のりの多い大地はありません。」

サン・シモンと同様にプルードンは、社会の構造的更新の問題を問題自体としてはとりあつかっていないが、それを前面に押しだし、しかも一層の充実と確実さとをこれに加えた。またサン・シモンが新しい社会の細胞として役立つべき社会単位の問題を提起しなかったのと同様にプルードンも、この問題にはるかに接近したにせよ、本質的にはそれを未解決のままに残した。まさしくこの問題をその探究と計画の主題とした者が、サン・シモンの同時代者とプルードンの後継者のなかにいるのである。

プルードンがこの問題をもっと強くとらえなかった理由は、とりわけ、ルイ・ブランが唱えた如き国家の設立による、一切の社会悪にたいする画一的万能薬としての「組合」、国家によって設立され融資され統制される農業および工業の「社会的工場」にたいする彼の疑念にある。ルイ・ブランの提案が——意図的にはそうでないにせよ性格上は——社会的・構造的であることは注意されなければならない。彼は「同一の工場におけるすべての労働者の連帯」から「同一の産業における各工場の連帯」へ、そこからさらに「種々の産業の連帯」へと進んで行く。また彼は生産と消費との結合の上に建設される農業協同組合を考えている。「万人の必要に応じ

るために」と彼はその『労働の組織』（一八三九年）でいっている、「万人の労働の生産物を生産することが必要である。」これこそはルイ・ブランが「友愛的組合体制」の「より根本的でより完全な」適用を即時的に可能ならしめるものと見る形態である。プルードンの疑念は、上に述べたように、新たな「国家理由」に、したがって画一性、排他性、抑圧にたいするものであった。プルードンは協同組合的形態を、農業よりも先に工業について考えたように見える。農業に関しては彼は農民階級の維持に意を用いた。（彼の思想および提案のあらゆる変化にもかかわらずプルードンは、土地はこれを耕す者に属するという原則を固く持っていた。）また工業に関しては、これに適した部門、さらに一定の機能にたいしてのみ、協同組合的形態を考えたいように見える。プルードンは社会の新しい秩序を画一化と同一視することを拒否する。秩序とは彼にとって多様性の正しい秩序のことである。エドゥアルト・ベルンシュタインが、プルードンは相互主義的協同組合に認めたことを、本質上独占的な協同組合には否認したといったのは正当である。プルードンは「上から」来る一切のもの、民衆に強制されるもの、特権で飾られるもの、にたいして深い嫌悪の念をいだいた。これに関連して新たな集団的エゴイズムの蔓延を恐れた。なぜなら集団的エゴイズムは個人的エゴイズムよりも危険なものと思われたからである。彼は自由市場を目ざして生産するすべての生産協同組合を脅かす危険を認めていた。すなわち組合が資本主義の精神にとらえられ、機会や景気を容赦なく利用するという危険で

ある。疑念は深刻であった。それは、正義をもって真の社会主義の標識とする彼の根本的見解に根ざしていた。そして正義はそれ自体自由と秩序とを互いに結合せしめ、また均衡せしめるのである。(プルドンによれば二つの観念、自由と統一または秩序が存在する——「人は両者を均衡せしめることによって両者とともに生きる決心をしなければならぬ」これを可能ならしめる原理を「正義」というのである。) しかしプルドンが告げる将来の人間社会の構造形態、自由と秩序との均衡を実現し、彼が連合主義と呼ぶところの構造形態は、たんに(彼がなしたように)連合すべき大きな単位すなわち諸民族フオルクを問題にするだけでなく、さらにそれらの連合的結合によって初めて真に民族が構成されるべきより小さな単位をも問題にすることを彼に要求した。この要求をプルドンはみたまなかつたのである。もし彼がこの要求からして自己の疑念にたいする解答を求めたなら、すなわち組合アソシエーションに内在する危険を一扫しないまでもそれを著しく少くするためには、組合をどのように助成し系統立てるべきかという問題に彼の最上の考察を向けたなら、そのときはじめて彼はこの要求をみたすことができただであらう。彼がそれを十分になさなかつたため、その相互主義の原理とともにこの方向にかくも重要なことがなされたにせよ、次の問にたいする十分な解答を彼に見出すことができない。すなわち「いかなる社会単位が真の民衆的秩序にまで連合するか、」あるいはもっと正確には「真の民衆的秩序、新しい正義の社会構造にまで連合しうべき社会単位は、どのようにして形成されなければならない

か」という問題である。かくしてプルドンの社会主義は本質的なものを一つ欠いている。なぜなら、現存の社会単位が、また古い共同体の形態を保持している社会単位が、そのまま正義のうちに相結合しうるかどうか、新たに成立する単位とても、その成立の当初からすでに同じ自由と秩序との結合が刺戟となり形成力となって働くのでなければ、それが可能であるかどうかについて、われわれは疑を抱かざるをえないからである。